

交雑種一貫肥育牧場における育成期の飼養管理法の確立と問題点

西播基幹家畜診療所

○三谷 睦 宮本孝明 宇崎敬与 今井正士
佐野 努 森本啓介 野口 等

ステール導入の肥育牧場では成長サイズに合わせた飼養環境が求められるため頻繁に牧場内での移動が余儀なくなされる。そのため牛へのストレス負荷が必然となり疾病の発症も避けられずに発育不良となり生産性を阻害させる状態に陥りやすい。

今回、交雑種ステール牛導入牧場での育成期における飼養管理方法について検討した。

材料および方法

対象牧場は交雑種ステール牛を県外より2か月齢、体重80～110kgを導入し26か月齢で出荷。年間導入頭数は約450頭。導入日より10日間単房にて個体観察を行い、その後群飼養へ移動する。これを2週間毎に繰り返す。4か月齢頃にはさらに群構成を大きくさせ一群15頭程度にする。育成期だけで10回の移動を経験することになる。

各年に改善策を提示し継続的に実施した。主な事項として移動経路の固定化、隔離個体の選抜、抗生物質の使用順位づけを決めた治療指針の作成、管理施設の整備（暑熱、防寒対策）など。

調査期間は2005年から2011年（1～12月を一年間とした）。調査項目は死廃事故、病傷事故状況、細菌検査及び薬剤感受性試験、集団呼吸器病発生状況とした。

結 果

1. 死廃事故は肥育用子牛において2005年から2011年でそれぞれ7(4), 6(4), 6(4), 2(0), 1(0), 1(0), 0頭であった。()は呼吸器病での頭数。
2. 病傷事故（導入頭数に対する割合）はそれぞれ560(1.09), 522(0.99), 598(1.20), 457(1.06), 448(1.00), 493(1.12), 424(1.02)件であり、平均診療回数は6.74, 7.13, 7.77, 8.77, 7.55, 8.36, 6.95回であった。
3. 鼻腔スワブから *Mannheimia haemolytica*, *Mycoplasma bovis* が分離され薬剤感受性試験においてはストレプトマイシンのみ耐性を示した。
4. 集団呼吸器病は2006年を除き毎年発生した。主に晩秋から初冬にかけて発生し主たる原因にはウイルスが関与し発症日齢は122日齢から209日齢だった。

考 察

頻繁に牛の移動が行われる本牧場のような飼養形態においては移動経路を固定化し、隔離選抜して回復させる施設を設置することが有用である。牧場側にとって子牛の死亡事故が皆無になったことは自信に繋がったと考えられる。しかし主に冬季に発生する呼吸器病対策が課題となり、この時期のワクチン接種プログラムや栄養改善を踏まえた予防対策が必要であると考えられた。